流星のロックマン4 ラストエンジェル

earth

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
流星のロックマン４　ラストエンジェル

【Ｎコード】
Ｎ２２３６Ｙ

【作者名】
ｅａｒｔｈ

【あらすじ】
世界を３度救った英雄その名もロックマン。
メテオＧを破壊してから、２年後の話。
中学１年生になった、スバル達は、楽しい学校生活を送っていた。
しかし、その幸せもつかの間、太陽系外からやってきた、新たな敵「イプシロン」。
スバル達を待つ運命は、希望か絶望か。

プロローグ（前書き）

ｅａｒｔｈです。初めての投稿です（＾―＾）／
頑張りたいと思います。

プロローグ

ここは、太陽系外のとある惑星。

コンコンと、2回ノックをして、黒い服の男が中に入った。

「失礼します。」

「何だ、ピエール。」

奥に居る男が、話し掛けた。

黒い服の男の名前は、ピエールという、背が高く、眼鏡をしていて、鼻が高く、目つきが鋭い。

「アダム様、例の物なのですが…」

奥に居る男の名前はアダムという。

髪の色が銀色で、肌が白い。

「例の物がどうした。」

「はい、完成いたしました。」

ピエールが真剣な顔で言う。

「本当か」

「はい、今はレベル6をも倒しております」

「そうか、もうレベル６か。」

「今は、インフェルノモードを使えるかどうか、実験中です。」

「わかった、もういいぞ。」
とアダムはピエールに告げた。

「はい、わかりました。」
そう言い、ピエールは、部屋をでていった。

「フッフッフッ～ようやく完成したようだな
これで地球は、私の物だ。私の邪魔など誰にもさせない。」

アダムはそういい、謎の部屋に入っていった。

プロローグ（後書き）

結構難しいですね。（「◇」；）
感想よろしくお願いします。＼（＾ｏ＾）／

転校生は、アイドル？（前書き）

ミソラが出てきますよー＼（＾ｏ＾）／

転校生は、アイドル？

メテオGの事件から2年後、スバル達は、
コダマ中学校の生徒になっていた。

「また、同じクラスね。」

この人は、みんな知っての通り、白金ルナ
僕等は、未だに委員長と呼んでいる。

「知らない顔もいますけど、ほとんど小学校
のまんまですね。」

この人は、最小院キザマロ物知りだけど、
背が低いことを気にしているらしい。

「腹、減ったな～。」

「ゴンタ君、いつも食べることしか考えない
のは、やめてください。」

いつも、食べる事しか考えない、この人は、
牛島ゴンタ、見るからにして、ガキ大将に
しかみれない。しかし、ウィザードの
オックスと電波変換して、
「オックス・ファイア」になるんだ。
頼もしいっちゃ頼もしい。

「でもさ、みんな一緒で良かったじゃん。」

「それもそうね。」

……と4人でやり取りしていたら、先生が入ってきた。

「席につけ、朝の会を始めるぞ」

『ハーイ』

「とその前に今日は、転校生がきているぞ」

『本当？』　『男かな女かな』

などという声が辺りから聴こえた。

「入ってきなさい」

と先生が転校生を呼んだ

入ってきた、瞬間、クラスが全員か、固まった。

「今日から、みんなと授業を受ける、
　響だ、みんな、仲良くするように。」

「今日から、このクラスで授業を受ける事に
　なりました。響ミソラです。よろしくお願
　いします。」

転校生は、アイドル？（後書き）

つぎはクラス戦争がおきます（「◇」；）
次回もよろしくお願いします。（「▽」）

学校で（前書き）

3話目できたぜｏ（＾▽＾）ｏ

学校で

響ミソラの自己紹介（みんな知ってるけど）が
終ったが、クラス全員は固まっていた。

「じゃあ、響の席は…」

先生の言葉に、固まっていたはずの男子生徒（スバル以外）の目い
っせいに鋭く光った。

『はいはいはーい、ミソラちゃんは、僕（俺）
の隣で～』

その光景を見たスバルは、苦笑いしか出来なかった。

『あの女、スゲー人気だな。』

ハンターＶＧの中から声が聞こえた。

「そうだね、ロック。やっぱり国民的アイド
ルは、違うね。」

『スバル。でもよ、俺達は世界を3度救った
英雄だぜ。』

「それは、関係ないでしょ。」

こいつは、ウォーロック。ＡＭ星生まれのＦＭ星育ち。通称ロック。
ロックと出会ったのは

３年前のＦＭ星襲撃の時だった。ロックは、アンドロメダのカギをＦＭ星から盗み、地球に
逃げ込んだ。僕は、ロックと出会って良かったと思う。もし出会ってなかったら、
父さんも救えなかったし、地球も終わっていただろう。

学校で（後書き）

感想よろしく／（＾ｏ＾）／

学校で２（前書き）

４話目出来たぞ

学校で2

『なぁ、スバル。』

「何、ロック。」

『あの女がきたって事は…もしたして。』

ハンターにもう1体増えた。

『ポロローン、それは一体誰のことかしら』

『げぇっ！ハープ。』

『スバル君、お久しぶりね。』

こいつは、こと座のハープ。3年前のＦＭ星人襲撃の時に地球に来
た。歌うことに悩んでいた、ミソラにとりつき、人を傷つけはじめた
がロックマンに止められ、今は、ミソラの
ウィザードとなっている。
電波変換すると、「ハープ・ノート」になる。

『おい！ハープ、早くあの女の所に帰れ。』

『うるさいわね、ウォーロック。』

そう言った、ハープの拳がウォーロックの顔面にヒットした。

『グッハッ。何するんだハープ。』

ハープは、容赦なく殴り付けた。さすがのウォーロックも気絶していた。

2体のやり取りを見ていた。

『俺の隣に』　『いや、僕の隣に』という

声が周りの男子生徒の声が聞こえた。

すると、ミソラが

「先生。私、スバル君の隣を希望　します。」

「ん。そうか。おーい星河、隣いいか。」

「えっ…あっ、はい。大丈夫です。」

ギラリ！

男子生徒全員とドス黒いオーラをまとった

委員長達の殺意のこもった、鋭い目が

スバルに向けられた。

（大丈夫かな、僕の中学校生活）

スバルの、思いも知らず、

ミソラは明るかった。

「よろしくね。スバル君☆」

「じゃあ、授業をはじめるぞ。」

～放課後～
授業が終わり、みんなは帰る支度をしていた
スバルは、ミソラに話かけられた。
「スバル君、後で屋上に来て。」
「いいけど、どうしたのいきなり。」
「内緒　だよ」

学校で２（後書き）

テスト勉強はじめなきゃ
エリアの騎士おもしろい

学校で３（前書き）

５話目きた～
ではどうぞ

学校で3

スバルは、ミソラに屋上に呼ばれたため、
今は、学校のエレベーターの前にいる。

「ロック。なんで、ミソラちゃんは、僕を
屋上なんかに呼び出すんだろうね？」

『知らねえ。俺に聞くな。』

「そうだよね。」

チンと音がなり、エレベーターのドアが開いた。

～コダマ中学校　屋上～

エレベーターに乗ったスバル（ロック）は、
屋上に来ていた。

「あれ、誰もいないじゃん。」

すると後ろから、目隠しをされた。

「だーれだ」

「うわぁ（こういうのって間違えた方がいい
んだよね。）ゴンタかな？」

「当たり。」

「嘘だろ。」

スバルは考えもしない、答えがかえってきたので、びっくりして目隠しをしていた人の手をどけた。すると、目の前には、ミソラがいた。

「やっぱり、ミソラちゃんか。」

「やっぱりってなによ、やっぱりって。」

「いや、別に。てか呼び出したりして、どうしたの。」

そしたら、ミソラの頬か、赤くなった。

「あのね、ス、スバル君、わっ私がなんで転校してきたか知ってる？」

「ミソラちゃん、頬赤くなってるよ。熱でもあるの？」

「ううん、大丈夫。」

「そう、それならいいけど。ミソラちゃんが転校してきた理由でしょ。分からないよ。」

「そうだよね。私ね、スバル君に会いたかったんだ。」

「僕も会いたかったよ。」

「スバル君の会いたかったは、友達としてでしょ。」

「どういうこと？」

ミソラは何か決心した表情をしていた。

「私ね。スバル君のことが好きなの。」

「ふぅーん……えっ、それって。」

ミソラは、コクッと頷いた。

「スバル君は、私のこと好き？」

いま、スバルは、すごいテンパってる。

「私のこと好き？」というミソラの言葉が頭の中をぐるぐる回っている。

学校で3（後書き）

テスト勉強はじめなきゃ

僕で良ければ。（前書き）

連続でＵＰしました。
ミソラちゃんって可愛いですよね。
スバルが、羨ましい。

僕で良ければ。

スバルは、とてもパニックに陥っていた。
なぜなら、　目の前には、国民的アイドルがいてその人は、自分ができた初めてのブラザーであり、命に変えてまでも守った人だったから。

「ミソラちゃん、本当に僕でいいの？」

「うん。スバル君じゃなきゃダメなの。」

「僕で良ければ、お願いします。」

「スバル君……グスッ、ウェェェン」

ミソラは、泣きくずれてしまった。

「ミソラちゃん、大丈夫？なんか悪いことした？」

「クズッ、ううん、嬉し泣き。」

「そうか。良かった。」

「スバル君…」

ミソラは、そういって、スバルに抱きついた。

「ミソラちゃん、やめてよ。」

スバルの顔が、急激に熱くなった。

「もう、少しだけ。」

どれくらい時間がたっだろう、も夕日が沈みそうでいた。

「ミソラちゃん、そろそろ帰ろっか。」

「そうだね。」

僕で良ければ。（後書き）

そろそろ、敵キャラ出さなきゃな。

嘘だ〜！（前書き）

テスト勉強しなきゃいけないのですが
投稿します。

嘘だ～！

スバルとミソラは、中学校を出て、住宅地を並んで歩いていた。

「ミソラちゃんの家ってベイサイドシティーだよね。」

「そうだよ。それがどうしたの。」

「イヤ、あのさ、家がベイサイドシティー
なんだからさ、電波変換で帰ればいいのに。」

「スバル君は、私と帰るのイヤ？」

ミソラは、今にでも泣きだしそうだ。
スバルは、ミソラのこの顔に一撃で、やられた。

「いや、ちっ、違うよ。コダマからミソラちゃんの家って遠いいじゃん。」

（スバル君、この顔に弱いな♪これから、この顔で甘えよう☆）

ミソラの泣きそうな顔は、すべて演技だった。スバルは、このことに気がつかない。

「うん。そのことは、大丈夫だよ。」

「ふーん。わかったよ。」

「これからさ。スバル君の家に行っていい？」

「いいと思うよ。」

それから、数分後、スバルの家が見えてきた。

「うわぁ、スバル君の家久しぶりだな～。」

「そうだね。さぁ、入ろっか。」

～スバルの家～

「母さん、ただいま。」

「お邪魔します。」

「スバル、ミソラちゃん、ご飯できてるわよ。」

この人は、僕の母さん、星河茜。

今は、僕と父さんと母さんの3人で住んでいる。

「僕は、まだしも何故ミソラちゃん？」

そう言うと母さんは、不吉に笑った。

「スバル、聞いて驚きなさい。今日から、

ミソラちゃんがこの家で住む事になったの。」

「はい、よろしくお願いします。」

僕の脳が一時的にストップした。

「嘘だ〜。」

嘘だ〜！（後書き）

どうでしたか？感想待ってます。

ミソラの家（前書き）

連続でｕｐ

ミソラの家

スバルは、今、頭がおかしくなっている。

「ミソラちゃんが、僕の家に。ハハハッ夢だよね。」

「スバル君のお母さん、スバル君が、スバル君が、おかしくなりました。」

「大丈夫よ。いつものことだから。」

スバルは、母のことばを聞いて目を覚ました。

「母さん、誰がおかしいって？」

「あなたの事よ、スバル。」

この2人のやり取りを見ていたミソラが笑った。

「何がおかしいの、ミソラちゃん。」

「いやー。スバル君の家って賑やかだなと思って。」

「ミソラちゃん。ここは、今は、あなたの家なの、だから私のことをお母さんて呼ぶこと
それと、帰って来たら、お邪魔します。じゃなくて、ただいまよ。
私もミソラって呼んでもいい？」

ミソラは、もう泣きそうだった、茜は、やさしいミソラを抱き寄せ

た。

『いいな、家族って。』

「あれ、ロックいつの間にいたの？」

『ずっと居たぜ。』

「静か過ぎてわからなかったよ。」

ミソラの家（後書き）

ねむいですが、頑張って書きました。

地球へ

～太陽系外の惑星～

「アダム様、どうしますか。すぐにでもガンマ部隊でも、地球に送りますか？」

アダムは、少しの間だけ考えた。

「いや、ヒートを呼べ。」

「わかりました。」

ピエールは、そう告げると部屋を出て行った。数分後ピエールは、赤い髪の男と一緒に入ってきた。

「アダム様、ヒートを連れて来ました。」

「うむ、ヒートよ、今から地球にいって来い。」

「アダム様、それって、地球消していいの？」

アダムは、飽きれた顔で言った。

「ヒート、お前は、いくつ惑星を消せばいいんだ。残念だが、まだ、消すな地球人には、
例の物を使う。お前は、オーパーツを探せ。」

「オーパーツを、探すのは、いいけど、喧嘩は、売っていいんだな。

」

「構わん。好きにせい。」

「わかりました、じゃあ、いってきます。」

「本当に、良かったのですか、アダム様。」

「いいんだ。結局奴も捨て駒だ。」

「ですが、ヒートを止められる奴っていますか。」

「地球には、青き流星と呼ばれている、地球を3回救った奴がいると、噂だ。」

「青き流星ですか、興味深いですね。」

～スバルの家～

今は、茜とミソラが、二人で夕食の準備をしていた。ミソラは、一人で今まで生活をしていたから、料理が得意である。

「なんか、本当の親子見たいだね。」

スバルは、この光景を見た本心であろう。

楽しく、しゃべりながら料理している、二人は、本当の親子見たいだった。

地球へ（後書き）

どうでしたか。感想待ってます

家で

スバルは、ミソラと茜が夕食の準備をしているので、スバルは、自分の部屋にいた。

「ミソラちゃんと母さん、本当に親子見たいだったね。」

『あぁ、そうだな。だがスバル、お前とミソラも夫婦みたいな物だろ。』

スバルは、とても顔を熱くした。

「なっ、何言ってるんだよ。そんな訳ないじゃないか。」

『言い逃れはよくないぜ、スバル。俺は、見ちゃったんだ。』

「誰と？」

『ハーブとだ、残念だったな。おフクロに言わなきゃな。付き合っていること。』

スバルは、辞めろと言おうとしたが、イヤな時にイヤな人が、はいってくる。

「スバル、その話し本当？」

そこにいたのは、茜だった。

「母さん、聞いてたの？」

「バッチリね。」

茜は、腕を出し親指を立てた。

「で、付き合っているの、スバル。」

「えーっと、付き合って「付き合ってますよ。」

そこに入ってきたのは、ミソラだった。

「ミソラちゃん、何言ってんの。」

「えー、いいじゃん、付き合ってるんだから。」

「スバルは、幸せもんね。こんなに可愛い子が彼女だなんて。」

（ロックこの状況なんとかして。）

《俺に聞くなよ。》

ミソラは、何故か顔が真っ赤だった。

たぶん、茜に可愛いと言われたからだろう。

その時スバルのハンターＶＧが鳴った。

（ナイスタイミング）

スバルは、そう思い、エアディスプレイをだした。そこには、見おぼえのある、顔が出てきた。

「久しぶりだな、スバル。」

「シドウさん、退院したんですね。」

ディスプレイに映っている、男は、暁シドウと言う。サテラポリスのエースとして、活躍していたが、ジョーカーと戦い、死んだと思われていたが、ウィザードのアシッドのお陰で、助かった。今は、ジャック、クインティア、と共に、サテラポリスにいて、最近、退院したらしい。

「スバル、明日は、暇か？」

「明日は、土曜日なので、大丈夫です。」

「そうか、じゃあ渡したい物がある、明日、サテラポリスに来てくれ。」

「はい、わかりました。」

家で（後書き）

漢検あきらめます

一緒に

スバルと茜、ミソラは、夕食を食べていた。

「ミソラが、スバルとね。」

「母さんもういいでしょ。」

「ミソラ、空き部屋作ったけど、どうする、スバルの部屋にする。」

「スバル君の部屋で。」

「即答。ミソラちゃん、ダメだよ。僕男だよ。」

「大丈夫だよ。スバル君、君は、そんなことは、しないキャラだから。」

「いや、キャラって。」

そんなやり取りをしていたら、大悟が帰ってきた。

「父さん、お帰り。」

「大悟さん、お帰りなさい。」

「お邪魔してます。」

「あっ、ミソラちゃん。いらっしゃい。」

「大悟さん、ご飯にする？」

「飯にするよ。」

この一人は、星河大悟。僕の父さん。

今は、大悟、茜、スバル、ミソラでご飯を食べている。

「へぇー、スバルとミソラが。」

スバルとミソラは、顔を真っ赤にして、ご飯を食べている。何故なら茜が付き合っていることをチクったのである。

「スバル、良かったな。」

「もう、辞めて、ご馳走でした。」

スバルは、さっそうと自分の部屋に帰って行った。

『スバル、顔真っ赤だぜ。』

「うるさい、ロック。」

～リビング～

今は、大悟、茜、ミソラで食べている。

「ミソラ。」

「はい？」

「スバルをよろしくない。」

ミソラは、頷きスバルの部屋に向かった。

「良かったな。スバル。」

「そうね。青春ていいわね。今日は、大悟さんに甘えようかな。」

「辞めろよ、茜。」

家

スバルと茜、ミソラは、夕食を食べていた。

「ミソラが、スバルとね。」

「母さんもういいでしょ。」

「ミソラ、空き部屋作ったけど、どうする、スバルの部屋にする。」

「スバル君の部屋で。」

「即答。ミソラちゃん、ダメだよ。僕男だよ。」

「大丈夫だよ。スバル君、君は、そんなことは、しないキャラだから。」

「いや、キャラって。」

そんなやり取りをしていたら、大悟が帰ってきた。

「父さん、お帰り。」

「大悟さん、お帰りなさい。」

「お邪魔してます。」

「あっ、ミソラちゃん。いらっしゃい。」

「大悟さん、ご飯にする？」

「飯にするよ。」

この一人は、星河大悟。僕の父さん。

今は、大悟、茜、スバル、ミソラでご飯を食べている。

「へぇー、スバルとミソラが。」

スバルとミソラは、顔を真っ赤にして、ご飯を食べている。何故なら茜が付き合っていることをチクったのである。

「スバル、良かったな。」

「もう、辞めて、ご馳走でした。」

スバルは、さっそうと自分の部屋に帰って行った。

『スバル、顔真っ赤だぜ。』

「うるさい、ロック。」

～リビング～

今は、大悟、茜、ミソラで食べている。

「ミソラ。」

「はい？」

「スバルをよろしくない。」
ミソラは、頷きスバルの部屋に向かった。
「良かったな。スバル。」
「そうね。青春ていいわね。今日は、大悟さんに甘えようかな。」
「辞めろよ、茜。」
～スバルの部屋～
スバルは、一人で宇宙の本を読んでいる。
「スバル君、スバル君。聞こえないのかな。」
ミソラは、スバルの、耳元で息を吹きかけた。
「うわぁ、何ミソラちゃん。」
ミソラは、黙っていた。
「用が無いなら、本読むよ。」
何故か、ミソラの顔が真っ赤だった。
スバルは、本を読もうと本に目をとうそうと、思った時ミソラに抱きつかれた。
ミソラちゃん、やめてよ。と言おうとした時だった。唇にミソラの唇が当たった。

「んぐぅ。」

数秒たった。

「スバル君、嫌だったかな。」

ミソラは、なにか言われるんじゃないかと思っていた。

「いいよ。別に。」

スバルの、言葉にミソラは、びっくりした。

ミソラは、嬉しさのあまりスバルにまた、抱きついた。その時だった。

「いい物、見せてもらったわよ。」

「母さん、何みてんの。」

スバルとミソラの顔は、真っ赤だ。

「いいじゃないの、別に、。」

「良くない。」

「まあ、いいわ。お風呂はいったわよ。

順番に入ってね、それとも…」

「はい、ストップ。」

「ミソラちゃん、先はいっていいよ。」

「うん、わかった。」

スバルとミソラは、順番にお風呂に入って、今は、スバルの部屋にいる。

「ミソラちゃん、僕のベッド使っていいよ。」

「スバル君は？」

「僕は、もう一つだすよ。」

「ヤダ。」

「何で。」

ミソラは、顔をほんのり赤くした。

「一緒に寝よう。」

「だっダメだよ。僕、男だよ。」

「大丈夫だよ、スバルそんな事しないから。」

「そのセリフどっかで聞いた。」

家（後書き）

どうでしたか。

次の日の朝。

「うーん、おはよう、ロック。」

スバルは、まだ眠いのか、目をこすりながら言った。

『スバル、久々に起きるの早いじゃねえか。』

「うん。今日は、サテラポリスに行くんだよね。何渡してくれるのかな。もしかして、新しく出た望遠鏡とか。」

『知らねぇよ。でも、望遠鏡ではないな。』

「そうだよね。」

隣では、ミソラが気持ち良さそうに寝ていた。

『スバル。ミソラも連れて行くのか。』

「いや、連れてかなくて良いんじゃない。」

『分かった。じゃあ行く準備をしようぜ。』

「行かせないよ。」

後ろから、声が聞こえた。

「ミソラちゃん、起きてたの。」

ミソラは、頷いた。

「いつから。」

「結構前から。」

「じゃあ今日、僕サテラポリスに行くから。」

「えー、私も行く。」

スバルは、少し考えた。

「分かったよ。じゃあ準備しよう。」

スバルとミソラは、朝食を食べにリビングに行った。リビングの中にはいると、大悟と茜が笑ってこっちをみた。

「おはよう、って何で笑っんの。」

「いやー、朝からいい物見せてもらいました、新婚さん。」

スバルとミソラは、顔を真っ赤にした。

何故なら、茜が寝て居るスバル達を内緒で見て、大悟に言ったのだ。

「スバル、お前、一緒に寝るのは、ダメだろ。」

「いや、それは…ミソラが。」

ミソラは、驚いたようにスバルを見た。ミソラは、自分のせいになったことじゃあなく、スバルに呼び捨てされたことにおどろいていた。

「まぁ、いいや。母さんご飯。」

「もう、出来てるわよ。」

そう茜に言われ二人は、テーブルに座った。

「スバル、今日どこ行くんだ、デートか。」

「ちっ、違うよ、今日は、サテラポリスに行くんだ。」

「スバル、顔真っ赤だぞ。」

そう言われ、スバルは、顔を触った。

「本当だ〜。」

「ミソラちゃんまで、辞めてよ。ご馳走様でした。」

「私も、ご馳走様でした。」

「じゃあ、行ってくるよ。」

「いってきます。」

「気をつけて、いってくるのよ。」

「はーい。」

二人は、元気に出て行った。

～日本コスモウェーブ～

「おい、そこのお前、オーパーツって知ってるか。」

ヒートの電波変換した姿は、赤い体、バイダーは、こげ茶色、アームに鋭く尖った爪。鷲っぽい。

「お前、見ない顔だな。オーパーツって何だ。」

「オーパーツを知らないのか。まぁいい、じゃあ死ね。」

ヒートは、電波君に突撃し、鋭い爪で引っ掻いた。

「うわぁぁぁぁぁ。」

電波君は、デリートされてしまった。

「ふぅ～どこにあんのか、オーパーツ。」

『そんな物、ないんじゃないか。』

「うるさい、レダ。」

～サテラポリス～

「いやぁー、着いたね、久しぶりだね、スバル君。」

「そうだね。」

サテラポリスは、１階～６４階までである。
ＷＡＸＡと合併している。

スバルとミソラは、サテラポリスの中に入って行った。その奥には、暁がいた。

「あっ、暁さん、久しぶりです。」

「そうだな、サクサクサクサク。」

「暁さんって本当にうまい棒好きだよね。」

「ところで、何をくれるんですか～。」

「ミソラちゃん、いきなり過ぎでしょ。」

「あぁ、それは、これだ。」

シドウは、奥の机にあった、ハンターＶＧをスバル達に見せた。

「これって、ただのハンターＶＧですよね。」

「いや、違うんだ。これは、ヨイリー博士の作った、ハンターＮＢだ。」

ノイズとニュートリノ

「ハンターNBって何ですか。」

スバルは、首を傾げた。

「ハンターNBの頭文字のNは、ノイズ、ニュートリノを意味する。」

「じゃあ、Bは。」

「Bは、まぁバージョンってところだな。」

「でも、ノイズは、メテオGを破壊してからなくなったんじゃないんですか。」

「あぁ、でもほんの少しでも、高性能ハンターNBは、感知できる。」

「へェ〜。」

「でも、ニュートリノってなんですか。」

ミソラは、暁に質問した。

「あぁ、それはだな…「暁さん、ここは、僕が。」

ミソラは、後悔した、スバルのオタクダマシイに火を付けてしまったことに。

「ニュートリノっていうのは、中性微子の仲間でね、ニュートリノ・ミューニュートリノ・タウニュートリノの…」

（やばいよ、スバル君のオタクダマシイに火を付けちゃったよ、何か話をそらせる話題はにいのか。）

「暁さん、他に機能は、ないんですか。」

「あっ、ちょっと。」

スバルは、いきなり話をそらされたので、いじけた。

「いいよもう。」

「他の機能は、うーん、あっそうだ、前、電波変換をする時は、トランスコードだっただろ。」

「それがどうしたんですか。」

「あぁ、それが、ユニゾンコードになったんだ。」

「ユニゾンコード？」

「ユニゾンコードは、簡単に言うと合体だな。スバルは、ＮＯ．００３、ミソラは、ＮＯ．００４だ。」

「じゃあ、ＮＯ．００２は、誰なんですか。」

いじけた、スバルが食いついた。

「ＮＯ．００２は、今、任務をしている。」

「そうですか。どんな、人ですか。」

「そうだな、電波変換すると、ゼロ・セイバーになる。」

「ゼロ・セイバー？」

「あぁ、紅蓮剣、フレイムサーベルを使う。」

激突

スバルとミソラは、シドウのうまい棒についての話を3時間フルで聞かされていた。
今は、帰ろうとしていた。

「ミソラちゃん。もう帰ろうよ。お腹減っちゃったよ。」

それわそうだ、今は、午後2時。家を出たのが午前9時。サテラポリスに着いたのが午前10。ハンターNBについての話が1時間。そして…シドウのうまい棒の話が3時間。よく話が続く物だと感心してしまった。

「そうだね。私もお腹減ったな〜。」

「嘘!!」

何故驚くかというと、ミソラは、サテラポリスにいた時にうまい棒をたらふくたいあげられていた。それにも、シドウはびっくりしていた。そして…ほとんど食べられていたので、いじけていた。

「まぁいいや。じゃあ帰ろうか。」

「待って。」

「どうしたの?」

「いや、せっかくだから…夕日でも見ながら。」

「別にいいけど…」

「じゃあ決まりね。いくわよ！ハープ。」

『えぇ。ミソラ。』

「ユニゾンコードＮＯ．００４　ハープ・ノート」

ミソラは、ハンターＮＢをかざし天に突き上げた瞬間ピンクの光に包まれ、ハープ・ノートへと変身した。

「おっ先に～。」

「あっ、ちょっと…ったくもう。」

「ユニゾンコードＮＯ．００３　シューティングスター・ロックマン」

スバルもハンターＮＢをかざし青い光に包まれ世界を3度救った英雄ロックマンに変身した。

『久しぶりの変身だな。』

「そうだね。じゃあ行こうか。」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2236y/

流星のロックマン4 ラストエンジェル

2011年11月29日21時49分発行